

海外の学生とのオンライン交流が英語学習意欲に与える影響

The Impact of Virtual Exchange on Motivation to Learn English

松崎 久美 MATSUZAKI Kumi

(デザイン領域)

1. はじめに

コロナウイルスのパンデミックにより遠隔授業を余儀なくされた大学では、ICTを利用した同期型授業又は非同期型授業が通常の教育手法として定着しつつある。学習者、教育者、大学がそれぞれインターネット環境を整え、さまざまなツールを活用することに徐々に慣れてきた頃、場所や時間に囚われず学習できるスタイルは、世界の距離を縮めることに繋がった。一見自由を奪われたかのような教育現場だったが、むしろ学習者、教育者ともに学習スタイルの選択肢が広がったことになる。これまでも文部科学省は2018年度「大学の世界展開力強化事業～COIL型教育を活用した米国等との大学間交流形成支援～」で協働型オンライン国際教育を推進し、国境を超えた海外との連携は日本の大学教育現場に用いられてきた。しかし、コロナパンデミックによりICTを活用した授業が定着したことで、国際的な活動が制限されたことにより、更に注目を浴びる教育手法となっている。オンライン留学など、海外との交流による教育実践に、パラダイムシフトをひきおこした。

こうした教育手法の開発は、英語教育現場にも大いに活用できるものである。これまでもインターネットを介したコミュニケーション (Computer Mediated Communication, 以下 CMC) では、時間差を許容する非同期型 (Asynchronous CMC, 以下 ACMC) とリアルタイムな同期型 (Synchronous CMC, 以下 SCMC) に分類されて実践報告がされている。コロナパンデミックにより、教室内で学生同士の発話を促し実践力を養成する授業ができなくなった現状では、教育者、学生ともにICTツールを利用するスキルが磨かれたこの状況を利用して、海外との交流を推進することは教育の質を維持することに貢献するだろう。

このような背景を踏まえ、本稿では、これまで実践報告されてきたCOIL, ACMC, SCMCの教育手法を取り入れてコミュニケーション不足を克服する英語教育の実践についてパイロット・ケース・スタディ¹⁾として位置付けて報告する。最初に、本稿で使用する用語の定義をする。そして、実践に至った経緯を述べ、先行研究から得られた仮説に基

1) イン (2011) では、パイロット・ケース・スタディは「さらに研究をすすめるためのパイロット・ケース・スタディとして実施する」(p. 57)、「当初の設計が不正確であることを明らかにしたり、それを明瞭にするのに役立つ」(p. 70)と述べている。

び実践目的を提示する。実践の内容と結果を説明し、最後に考察と今後の研究設計への示唆と教育実践及びカリキュラムへの提案を目指すものとする。

2. 用語の定義

ICT を利用した授業実践には類似した意味を持つ様々な用語が使われている。また、英語教育の分野で使用される専門用語と、国際的な教育活動の分野で使用されるものが存在する。ここでは本論文における用語の定義を確認しておきたい。

ICT を利用した授業実践で用いられる「同期型」とは、Zoom や Google Meet などのアプリケーションを利用し、教員と学生がオンラインで繋がり同時に授業の進行をすすめるものである。「非同期型」とは、配信された資料や動画を学生が適宜視聴、ダウンロードして学習する形態で「オンデマンド」とも言われている。英語教育では、ネットワークに接続された電子機器を介したコミュニケーション (CMC) による教育手法について多くの研究報告がされているが、Nguyen (2008) は、時間差を許容する非同期型 (ACMC) とリアルタイムな同期型 (SCMC) に分類している。ACMC の例としては、電子メールやビデオメッセージの交換などが挙げられる。SCMC はビデオ通話やその場のチャットでやりとりするコミュニケーションが代表的である。本稿では、ICT を利用した同期型のコミュニケーション実践を SCMC とし、非同期型のコミュニケーション実践を ACMC と扱う。

また、外国語学習者に関しては、第二言語 (L2) 学習者、外国語学習者 (Foreign Language Learner, FLL)、第二言語としての英語 (English as a Second Language, ESL) 学習者、外国語としての英語 (English as a Foreign Language、以下 EFL) 学習者と様々な言い方がある。本稿における調査対象者は、教育現場で学ぶ外国語としての英語のため、EFL 学習者として扱う。

3. 研究の背景

本研究は、筆者の本務校である愛知県内の芸術・教育系学部を有する私立大学において、2020年新学期当初に新入学生に対して実施した「英語に関するアンケート」に端を発している。学生は主に芸術または教育を専攻とし、語学や国際系学問を主専攻とする学生はいない。アンケート結果によると多くの学生が「英語に対して苦手意識を持っているが、英語の上達、特にコミュニケーションスキルの獲得に興味がある」ことがわかった。また、過去の経験においては「海外経験や外国人と実際にコミュニケーションをした経験が少ない」が多数を占めていた。自己効力感が低く成功体験がない学習者像が浮かび上がった。こうした結果は、「短期プログラムの充実や ICT を利用した COIL (Collaborative Online International Learning) の授業手法を取り入れて、学生を早い段階で世界に接触させるようなカリキュラムや教育実践」が、英語教育の効果を促進させる可能性を示唆し

ていた（松崎，2021）。

また、コロナパンデミックにより、対面授業からオンデマンド授業に移行したため、教室内で学生同士の発話を促し実践力を養成する授業ができなくなった。文法やライティング、リスニングなどは、授業動画を繰り返し視聴することで学生の理解力を高めることはできる。しかし、即効で発話をするコミュニケーションやスピーキング、学生同士が学び合う協働学習を促すことは困難となり、教育の質を維持するために新しい教育手法を取り入れる必要性を感じた。

このような状況を踏まえ、国際的な活動を授業に取り入れられる教育手法として COIL に着目した。COIL は様々な段階が考えられており、適切な設計のもとで実施されるべきである。日本で最初に COIL を取り入れ「日本 COIL 協議会」を設立した関西大学では、最初の段階の COIL を「Pre KU-COIL “One Time Virtual Exchange”²⁾（同期型コミュニケーションを授業に 1 回だけ導入する形式）とし、COIL 運営を試し、簡単な ICT ツールを用いて教員と学生が企画・立案・実行の流れを経験する段階としている（関西大学）。試験的な実施のため学生とパートナー大学への負担を少なく教育効果を高める取り組みとして、“One Time Virtual Exchange”を授業内で実施することを企画した。

先にも述べたが、コロナパンデミックがもたらした ACMC と SCMC により実践ができることになった取り組みである。十分な研究理論設計に基づき実施された調査ではない。ただし、アンケート調査により、本取り組みは、今後のカリキュラムや授業設計に必要な情報を得るためのパイロット・ケース・スタディと位置付けて実践する。

4. 先行研究

ICT の発展に伴い、国際教育や言語教育の視点から様々な ACMC 及び SCMC の教育実践が報告されている。ACMC と SCMC の定義をした Nguyen (2008) は、CMC に関するメタアナリシス研究で、ACMC と SCMC の教育的特徴を「Motivation（動機付け）」、「Active Learning（アクティブ・ラーニング）」、「Reflective Learning（内省的学習）」、「Learner Autonomy（学習者の自立）」、「Collaborative Learning（協働学習）」に類型し、それぞれの特徴における CMC の利点を明らかにした。Authentic（本物）のテキストや言語に触れることは、各スキルの発達に有益であり、特にスピーキングスキルの発展の可能性を見出している。日本のような非多言語社会である EFL 環境では、Authentic な言語との出会いは重要な意味を持つと考えられる。スピーキングは、CMC の教育活動が発達するにつれて、実践が活発になっている分野である。小林（2021）は、ACMC と SCMC を組み合わせて、学生が海外の生徒（高校生）と交流することでスピーキングの

2) ウェブサイト参照。https://www.kansai-u.ac.jp/Kokusai/IIGE/jp/resources/KU-COIL.php。“KU”とは、関西大学の頭文字をとったものである。他に COIL を実践している南山大学では同様な取り組みを「ベーシックコイル」と呼んでいる。https://office.nanzan-u.ac.jp/nu-coil/nu-coil/index.html

抵抗に及ばず影響について調査している。スカイプを利用した SCMC では、自身の英語が伝わったことによる成功体験や、仲間との協働により不安が軽減された効果を報告している。また、動画交換 (ACMC) では、繰り返し視聴できること、客観的に自身の動画が視聴できることなどが有益であると挙げられていた。Nguyen (2008) の示した CMC の教育的特徴を裏付け、さらに、それぞれの利点を組み合わせた交流が、英語スピーキングの不安を軽減させ英語学習の動機付けに貢献していることが確認された。

英語の自己効力感は、学習者の自信や学習動機を高める可能性がある (和田, 2019)。和田は、英語が苦手だとする自己概念は、英語学習に対する消極的な構えを生み出し学習に対する阻害要因となる可能性を指摘している。牧野 (2016) は、リメディアル教育 (英語が苦手な学生対象) 現場では、文法とリーディング中心の授業では学生の自己効力感は上がり、スピーキング指導により英語に対する自己効力感が向上し学習意欲も上がることを報告している。過去にスピーキング指導を受けていない学生が多いことや、スピーキングでは学習者が能動的に学ぶことが理由に挙げられていた。これまでとは異なる「新しい学習」を授業に取り入れること、また、実践的なコミュニケーションの方が学習意欲を高める可能性を示している。また飯野 (2015) は、授業に循環的に SCMC を取り入れたことにより、英語習熟度とスピーキング力が発達したことを報告している。これらの実践報告から、授業内に計画的にスピーキングを中心とした SCMC を取り入れることで、英語が苦手な学生の自己効力感が向上し、英語習熟度の発展につながる可能性を導くことができる。

英語学習の動機付け理論では、「コミュニケーションをする意欲 (Willingness to Communicate 以下、WTC)」を言語学、コミュニケーション、社会心理学的変数との関係から概念化を試みた研究がある。Macintyre et al. (1998) によると「L2を利用したポジティブ (肯定的) な経験は学びの動機付けになる」としている。Yashima et al. (2004) の調査では、英語を使用する不安が低いほど、WTC の意欲は高まることを明らかにしている。コミュニケーションスキルを磨くためには、成功経験が動機付けと関係している一方、自身の英語力や英語によるコミュニケーションに不安があると、WTC の意欲は下がる。その結果、英語に対して自己効力感が低い学生は、いつまでも WTC が高まらず、成功経験もないまま学習意欲も高まらない事になる。渡邊 (2017) は、コミュニケーションを行うスピーキング授業において EFL 環境の学習者の WTC が高まったことを報告している。つまり英語教育現場では、コミュニケーションをする場を提供し、経験がプラスになり英語学習動機付けに重要な WTC を高めるような教育的仕組みづくりが求められる。

また、第二言語 (外国語) 使用している理想的な自分 (Ideal L2 self) の存在は、外国語学習の動機付けになる (Dörnyei, 2009)。そのためには具体的に現在の自己と理想の自己との乖離を明らかにして目標を設定する必要がある。本研究の対象とする学生は、これまで実際に L2 を使用したコミュニケーションを経験したことがないために理想とする自

己 (Ideal L2話者) 像が曖昧である可能性がある。コルブ (1984) の経験学習の学習理論を応用すると、①具体的経験 (コミュニケーション)、②内省的観察 (自身の現状を振り返る)、③抽象的概念化 (理想の L2像を描く)、④実践 (目標に向けた次なる経験)、により理想の L2像を描き、学習意欲が高まると考えられる。具体的経験の機会は動機付けに必要な教育的介入と考えられる。

以上の背景と先行研究を踏まえ、本調査では、これまで英語を使用して Authentic (本物) のコミュニケーションを経験したことがなく英語への自己効力感が低い学生が、実践経験をすることで考えられる英語への情意的変化と英語学習意欲の変化を調査することを目的とする。本研究のリサーチ・クエスチョン (RQ) は以下のとおりである。

- (1) 本物のコミュニケーション体験は、英語や外国人とのコミュニケーションに対し苦手意識や不安といった情意面を取り除くことができるか
- (2) 本物のコミュニケーション体験は、英語学習意欲は高めることができるか
- (3) 本物のコミュニケーション体験は、海外や異文化への興味関心を高めることができるか

5. 調査方法

5.1 参加者

本実践研究の参加者は、愛知県内の私立大学で美術、デザイン、芸術教養、音楽などを専攻する非英語専攻の学部生33名である。参加者は一般教養科目の語学科目 (英語) 受講生である。海外の参加者は、アメリカ中西部に位置する大規模私立大学で、日本語を履修している学生を対象に参加者を募集した。

回答者33名のうち11名が「英語を使用して海外の方と交流した経験がある」と回答している。そのうち、6名はゲームやSNSを通じたテキストによる交流であり、直接会話を経験しているのは5名であったが、その頻度など経験値は明らかにはなっていない。

5.2 実施時期、データ収集方法

交流は2020年11月に実施した。参加者の交流会実施後の英語学習の動機や異文化への関心の変化について調べるために、交流会終了後に質問紙調査を実施した。データは、グーグル・フォーム (Google Form) を用いて収集された。グーグル・フォームによるデータ収集は、これまで授業内で使用しており、参加者への回答負担を削減するために使用した。参加者には、アンケート実施時に本実践研究に対する協力と個人情報保護に関して同意を得た。

5.3 質問紙内容

先にも述べたが、本調査は、本学の学生にとってどのような教育実践が有効か、を探る

調査研究につなげるためのパイロット・ケースであり、コロナウィルスパンデミックにより急速 ICT による遠隔授業が必要となり、また感染者の数や政府の方針により授業形態が変化する不安定な状況で実施した調査である。そのため事前に十分な調査デザインを検討できていない。しかし、動向を探るために以下の構成で調査を実施した。

- ① 交流会の実施後のコミュニケーションに関する自己評価：選択及び自由回答
- ② 交流会後の英語と外国人とのコミュニケーションに対する情意的変化：評定尺度法（逆転項目含む）
- ③ 今後の教育実践の在り方：多肢選択法（複数回答）

上位2つについては、交流会が学生に及ぼした影響について探り、最後の質問は今後の授業設計及びカリキュラムへの提案を探った。

6. 実践内容

本実践は、筆者が担当する教養教育科目必須「英語2」「英語3」の授業の一部として実施している。そのため、準備から活動、リフレクションまで、一連の過程を経て設計されている（表1）。参加者のほとんどが実際に英語をコミュニケーションツールとして使用したことがない学生である。そのため少しでもコミュニケーションが円滑に進むように事前に、「話題にしてみたいこと」について「アニメ」「映画」「音楽」「スポーツ」「芸能人」「文化・歴史」「その他」でアンケートをとり、アメリカの大学担当者に共有した。次に交流会参加まで以下のような手順を踏んだ。実際のコミュニケーションでは、日本語学習者を対象としているので、日本語で話すことも想定している。

表1 実践スキーム

段階 (週)	目的	活動	ツール	モード
準備1	コミュニケーションで使用する表現を学ぶ	自己紹介の作成 聞きたい質問を考える 聞かれそうな質問に対して回答を考える	Padlet Zoom	同期 (一部非同期)
準備2	表現を使用して練習する	ブレインストーミング：模擬体験 ・コミュニケーションの態度について確認 ・基本フレーズの復習	Google Jamboard Zoom	同期 (一部非同期)
経験	実際に英語を使用してコミュニケーションを図る	L2を利用し会話をする	Zoom	同期
内省	活動をふり振り返り、自身の英語力とコミュニケーション力を評価する。また、活動により語学学習の動機付けの変化を確認する	自身の行為、経験出来事の意味を各自で振り返り、意味付ける	Google Form	非同期

7. 結果

7.1 交流会の期待と現実

最初に交流会に期待していた成果と自身の経験を客観的に振り返る質問を用意した。自

身が成功した理由と失敗した理由を考え、次への実践へとつなげる「意味づけ」を意図している。表2のとおり、多くの学生が交流ができた（成功体験）と感じ、目標またはそれ以上の成果を感じている。それぞれ自身の評価について自由記述から、「達成の理由」と「達成できなかった理由」に分類した。「期待以上」に交流ができた学生は、「事前」に何らかの準備をしたり、ノンバーバルなコミュニケーションを利用したり、他の仲間と協力するなど、コミュニケーションの障害を乗り越えるための様々な工夫に挑戦していることがわかる。達成できなかった理由には、単語不足や発音などの言語知識に関する理由があげられており、交流会の評価状況にかかわらず共通している。一方で、「期待以下」のグループでは、言語レベルではなくコミュニケーション方法の課題が存在している点が特徴的であった。「仲間との協働」やコミュニケーションの障害を乗り越える工夫により、言語能力にかかわらず、コミュニケーションを成功へと導く可能性が見られた。

表2 交流会の期待と自己評価

意思疎通（コミュニケーション） をすることができましたか？	できな かった	あまりでき なかった	まあまあ できた	できた
	3	8	19	3
期待以下	3	6	4	0
期待通り	0	1	6	1
期待以上	0	1	9	2

表3 交流会達成状況の理由

交流会の 成果	達成できた理由	達成できなかった理由
期待以上	「単語を控えておいた」 「事前に調べ」「事前に発音練習」 「事前資料」「単語を補う」 「手振り身振り、ジェスチャー」 「仲間と協力」「チャットを利用」	「単語が出てこなかった」 「用意しておけば」
期待通り	「発音に注意」「趣味」 「頑張って話そうとした」 「ジェスチャー（笑顔）」	「単語が出ない」 「発音が通じない」
期待以下	「事前に質問を用意」 「単語を繋げた」	「途中から入ったときに今までに質問された内容 と被ったらどうしようと思い質問できなかった」 「戸惑ってしまい理解したくてもできない状況」 「人数がいると誰に質問すればいいのか」 「言葉が出ない」「伝わらない（発音）」 「聞き取れない」

7.2 英語とコミュニケーションに対する心理的变化について

交流会実施後に英語学習や英語によるコミュニケーション、異文化・海外への興味や理解に関する心理的变化について、1（減った）、2（多少減った）、3（かわらない）、4（多少増えた）、5（増えた）の5件法を用いて尋ねた（*は逆転項目であるがそのまま記

載している)。各回答の合計数に経験に対する自己評価とその後の情意変化をみるために、「交流会の自己評価」の回答者数を入れて表にまとめている(表4)。参加者全体の意識の変化に関する成果と状況が明らかになった。

全体的に、英語を話すことや外国人とのコミュニケーションに対する障壁は克服できたようである。しかし、交流会の自己評価が低い学生ほど、英語を話すことや外国人とのコミュニケーションへの恐怖心や苦手意識といったネガティブな感情は多少増加傾向である。前項のアンケート結果から、これらの学生は事前な準備が十分でない、言語能力に関わらずコミュニケーションが不得手な可能性がある。交流会前に積極的に事前準備に関わ

表4 交流会の自己評価と情意的変化

	減った	多少減った	かわらない	多少増えた	増えた
Q1 英語を話すことへのポジティブな感情	0	4	6	13	10
(交流会の自己評価、以下同じ) できなかった	0	1	1	1	0
あまりできなかった	0	3	2	3	0
まあまあできた	0	0	3	8	8
できた	0	0	0	1	2
Q2 英語を話すことへのネガティブな感情	6	9	14	4	0
できなかった	0	0	2	1	0
あまりできなかった	1	1	3	3	0
まあまあできた	4	6	9	0	0
できた	1	2	0	0	0
Q3 外国人と話すことへのポジティブな感情	0	3	3	14	13
できなかった	0	1	1	1	0
あまりできなかった	0	2	2	4	0
まあまあできた	0	0	0	9	10
できた	0	0	0	0	3
Q4 外国人と話すことへのネガティブな感情	6	12	13	2	0
できなかった	0	0	2	1	0
あまりできなかった	0	3	4	1	0
まあまあできた	5	8	14	0	0
できた	1	1	1	0	0
Q5 英語学習への意欲	1	1	10	17	4
できなかった	0	0	2	1	0
あまりできなかった	0	1	4	3	0
まあまあできた	1	0	3	12	3
できた	0	0	1	1	1
Q6 海外への関心興味	1	2	6	14	10
できなかった	0	1	1	1	0
あまりできなかった	0	1	3	4	0
まあまあできた	1	0	2	8	8
できた	0	0	0	1	2
Q7 異文化への理解や新たな視点	1	1	8	14	9
できなかった	0	0	2	1	0
あまりできなかった	0	1	3	4	0
まあまあできた	1	0	3	9	6
できた	0	0	0	0	3

るような教育的仕掛けと、常日頃からクラス内で学生同士のコミュニケーションを促す必要がある。一方、英語学習意欲や海外・異文化への理解については、交流会の自己評価にかかわらず増加傾向にある。交流会をきっかけに自己の状況を客観的に見つめ直し、自身の課題を概念的に捉え直している可能性を示唆している。

7.3 授業設計への要望

今後、こうしたオンライン交流を取り入れる際の適切な授業設計を検討するために、内容、準備、方法等に関連するいくつかの質問を用意した。最初に、海外の学生との交流活動は「授業内」か「授業外」で実施するべきか、という質問には17名が授業内活動と回答している。苦手なことを避ける傾向にある心理を考えると、教育的な介入が必要であることを学生自身も自覚しているようだ。また、今後のオンライン交流の実施の方法や仕組みについて、想定される質問を幾つか用意し複数回答可とした(表5)。準備や実施の枠組みについては、「数回に渡る」「色々な国の学生との交流」、そして「事前」に非同期による交流(ACMC)を選択した学生が多い。経験を振り返り自己の課題を発見する機会を得て、次の実践への必要を感じている様子が読み取れる。また、経験を通じて、不安が取り除かれた結果、異文化や海外への興味関心が高まったと考えられる。「専門分野に特化した交流」に関心が高いのは、学生が「芸術」に関連する学問を専門としていて、異文化との交流により学術的関心について視野を広げることに関心がある可能性がある。例えば、自由記述に、同じ「アニメ」「映画」の話題についてのコメントが見られた。一方で、課題を共に解決する協同学習や、語学のみの特化した内容への関心が低いという特徴が見てとれた。今後の実践スキームの設計への示唆が得ることができた。

表5 交流会の実施方法について

事前に自己紹介動画などの交換	10
数回にわたる交流	12
色々な国の学生との交流	12
共通課題を用意した協同学習	2
専門分野に特化した交流	10
語学学習	3
特がない(今回のような形でよい)	10

7.4 自由記述による気づき

最後に、各自が交流会を通じて気づいた点について自由記述(選択)の項目を用意した。該当者33名のうち13名が回答した。文化に対する気づき(日本のアニメや文化が知られている。同じ映画を見ている、共通の趣味、日本人と同じ)、語学やコミュニケーションに対する気づき(聞く態度や反応の重要さ、知っている単語で理解ができる、もっと会話できるようになりたい)に関する記述が目立った。これまで実際にコミュニケーションをしたことがない画面の向こうの海外の学生は、言葉や育った環境が異なっても、「同じような趣味や関心をもつ同世代の存在」と認識する機会となったのだろう。また、Authentic(本物)のコミュニケーションを通じて、言語の壁を乗り越えるには単なる知識だけではなくコミュニケーション力が必要なことを感じたようである。そして「もっと

会話できるようになりたい」と、理想のL2像を具体的にイメージすることができた学生もいた。

8. 考察と今後の課題

本調査の結果、「英語が嫌い、苦手」と感じている学生は、実際のコミュニケーションを経験し、成功（肯定的）経験をすることで英語に対するネガティブな感情が減少され、Macintyre (1998)と同じ結果が得られた (RQ1)。しかし、経験の自己評価が低い学生に対しては、ネガティブな感情は増加傾向であった。一方で学習意欲は成功経験に関わらず高まっていた (RQ2)。自己評価が低い学生が次の経験で更なる失敗により学習意欲が減少しないように配慮して授業設計をする必要がある。自己評価の低い学生においては、授業前の準備不足や語学力には関係のないコミュニケーション力が課題であることが推測される。交流会を成功に導くために、平日頃からクラス内で協同学習やコミュニケーションの機会を積極的に取り入れる授業設計が必要であることが示唆された。また、Authentic (本物) のコミュニケーションは、英語学習動機付けの要因の一つでもある異文化や海外への興味関心も高めていた。「複数回の交流」や「色々な国の人との交流」が今後の実践への提案となっていたのは、言語や環境が異なっても同じ趣味や興味関心があることへの気づきが影響しているのかもしれない。今回は、特にトピックを決めない交流だったが、語学に特化する交流より「専門分野に特化」する交流への関心の高さは、渡邊 (2017) の「HTCがWTCを高める」結果に一致している。今回の調査は十分な理論設計ができていないパイロットケースだったが、高校までの英語教育で「英語が嫌い、苦手」と感じている学生にとって、大学における一般科目の英語教育で学生たちの学習意欲を掻き立てるためには、先行研究で見られたような「新しい手法」を取り入れ、「コミュニケーション」学習が有効で、さらにトピックを限定することで、英語学習動機付けに必要なWTCが高まる可能性を確認できた。

今回、海外の学生とのコミュニケーションが英語学習意欲に与える影響について予備的な調査結果を得ることができた。今後は、本調査結果から得られた仮説をさらに検証するために先行研究の知見を整理し、理論枠組みを決定して信頼性と妥当性を十分に検討した調査を行う必要がある。さらに、授業設計においても、複数回の交流による経験学習の成果や統制群と対称群の比較や、統計手法を用いて回答間の相関関係を明らかにする必要があるだろう。そして、より真実に迫った研究結果を導きたい。

謝辞

本実践に協力いただいた、デンバー大学言語文化センター 日本語教育プログラムコーディネーター助教 濱本三保先生に感謝申し上げます。

本実践は名古屋芸術大学令和2年度特別研究費の助成を受け実施しました。

参考文献

- Nguyen, V. L. (2008) Computer Mediated Communication and Foreign Language Education: Pedagogical Features. *International Journal of Instructional Technology & Distance Learning*, 5(12), 23-44.
- イン, K. ロバート, 近藤公彦 (訳) (2011) 『新装版 ケース・スタディの方法 第2版』千倉書房.
- 松崎久美 (2021) 「大学生初年次の英語に関する意識調査—名古屋芸術大学における全学共通科目「英語1」受講生に対するアンケートより—」『名古屋芸術大学紀要』42, 319-327.
- 小林翔 (2021) 「英語でのスピーキングに対する抵抗感の変化—ICTを活用した協働国際交流に焦点を当てて—」『ARELE』32, 61-176.
- 和田珠美 (2019) 「大学入学時における英語力と英語自己効力感がその後の学習効果と効力感に及ぼす影響」『中部地区英語教育学会紀要』48, 81-88.
- 牧野眞貴 (2016) 「英語リメディアル授業におけるスピーキング指導と自己効力感の関係についての一考察」『関西英語教育学会紀要』39, 1-15.
- 牧野眞貴・平野順也 (2014) 「英語リメディアル教育の現状を探る：教員の意識調査から見えてくること」『リメディアル教育研究』9(2), 181-192.
- 飯野厚 (2015) 「ビデオ会議による異文化間コミュニケーションが英語スピーキング力と国際的志向性に及ぼす影響」『経済志林』83(1), 121-143.
- 渡邊万里子 (2017) 「日本人英語学習者の Willingness to Communicate とコミュニケーション活動における伝達内容」『中部地区英語教育学会紀要』46, 71-78.
- Macintyre, et al. (1998) Conceptualizing Willingness to Communicate in a L2: A Situational Model of L2 Confidence and Affiliation, *Modern Language Journal*, 82, 545-562.
- Dörnyei, Z. (1994) Motivation and Motivating in the Foreign Language Classroom, *The Modern Language Journal*, 78(3) (Autumn, 1994), 273-284.
- 八島知子 (2001) 「『国際的志向性』と英語学習モチベーション—異文化間コミュニケーションの観点から—」『関西大学外国語教育研究』1, 33-47.
- Yashima, T. (2002) Willingness to communicate in L2: The Japanese EFL context. *The Modern Language Journal*, 86, 54-66.
- (2009) International Posture and the Ideal L2 Self in the Japanese EFL Context, *Motivation, language identity and the L2 self*, 144-163.
- Yashima, et al. (2004) Influence of attitudes and affect on willingness to communicate and L2 communication, *Language Learning*, 54, 119-152.
- 宮本聡介・宇井美代子編 (2014) 『質問紙調査と心理測定尺度—計画から実施・解析まで—』サイエンス社.
- Bandura, A. (1977) Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change, *Psychological Review*, 84(2), 191-215.
- Botes, E. et al. (2020) A systematic narrative review of International Posture: What is known and what still needs to be uncovered. *System*, 90, retrieved from <https://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S0346251X19303227>
- Kolb, D. A. (1984) *Experimental Learning: Experience as the Source of Learning and Development*, Prentice Hall.
- 関西大学, “About COIL”, https://www.kansai-u.ac.jp/Kokusai/coil_2/about/, 最終閲覧日2021年10月26日.

南山大学, “南山大学 COIL プログラム”, <https://office.nanzan-u.ac.jp/nu-coil/nu-coil/index.html>, 最終閲覧日 2021 年 10 月 26 日.

付録 質問紙調査

交流会について教えてください。

1. デンバーの学生とは、意思疎通（コミュニケーション）をすることができましたか？
2. 意思疎通（コミュニケーション）はご自身の目標の期待通りでしたか？
3. 上記の回答について、達成のために努力した点、達成できなかった場合の理由は何でしたか？
4. グループ内の会話は、主に日本語、英語どちらでしたか？
5. 今後、こうした交流は授業内であったほうが良いと思いますか？
6. 交流を通じて以下の点で変化はありましたか？
 1. 英語に対するポジティブな感情（楽しい、役に立つ、簡単など）
 2. 英語に対するネガティブな感情（恐怖心、苦手意識、嫌悪感など）
 3. 外国人と話すことへのポジティブな感情（楽しい、役に立つ、簡単など）
 4. 外国人と話すことへのネガティブな感情（恐怖心、苦手意識、嫌悪感など）
 5. 英語を学ぶ意欲
 6. 海外への興味
 7. 異文化への理解など新たな視点
7. その他ご自身で何か気づいたことがあれば書いてください。
8. 今後、オンラインによる学生交流を実施していくにあたり、事前学習や交流計画など提案があれば教えてください。（複数選択可）
 1. 事前に自己紹介動画などの交換
 2. 数回にわたる交流
 3. 色々な国の学生との交流
 4. 共通課題を用意した協同学習
 5. 専門分野に特化した交流
 6. 語学学習
 7. 特にない（今回のような形でよい）
 8. その他

Abstract

This practical study investigated the impact of actual communicative experiences on students' motivation to learn English. It is said that when students feel uncomfortable with English, they try to avoid using it and their motivation to learn may decrease. On the other hand, the successful experiences of communicating in the L2 can have a positive effect on English language skills and motivation to learn. This project explored the effects of an educational intervention that provides students with opportunities to interact virtually with overseas students using ICT on students' affective change towards English and their motivation to learn. This is a pilot case study and will lead to suggestions for future research and lesson design.